善正寺だより

〒:512-0902
三重県四日市市
小杉町1014
浄土真宗
本願寺派
善　正　寺
TEL:0593-31-1670
FAX:0593-32-0733

掲示板法話

寂しさを超える道
それは再び遇える世界があるからです

肉親とのお別れからしばらく過ぎると、浄土真宗のご門徒は大谷本廟への納骨をされます。先日、納骨に先立って家のお仏壇に暇を告げる「ご遷骨法要」にお参りしました。

幼い孫が安置されているお骨を眺めて「これなあに？」とお婆ちゃんに尋ねました。「僕のじいちゃんのお骨よ。じいちゃんは仏さまに成ってお骨だけ残ったの。だから、『親鸞さま有難う』とお礼して親鸞さまのお墓に納めるの。婆ちゃんも僕もみんないつか、お骨になるのよ」「ふうん、みんな？」「うん、いつか分からないけど、僕も『仏さま有難う』といえる子になるのよ」。孫の頭を撫でながら、奥さんは改めて合掌、お念仏申されました。私は「素晴らしい仏法相続の姿ですね」とお喜び申しました。

お勤めの後で、奥さんは「孫にはあのように言いましたけれど、寂しさはあります。でも主人が亡くなった後、孫ができて新たな生きがいを感じます。姑から育てられたように、今度は若夫婦や孫に仏縁をつないでいくのが私の仕事だと思います」と言われました。「そうですね。今度あの子達も一緒にお参りしてくださるのは、大切な命のつながりを肌で実感する仏縁です。親鸞さまのおかげで、別れても再びお浄土で遇える世界がある慶びを教えられたのですから、「親鸞さまありがとう。おじいちゃん有難う」とお参りしてください、とお話させて頂きました。

この夫婦はご主人が生前の間に、連研を受けて、知り合ったよき師、よき仲間に導かれて、臨終の病床でもお念仏申しつつ別れを惜しまれました。ご主人亡き後は、中央仏教学院に学んでおられます。更に、奥さんは「『氷多きに水多し、障り多きに徳多し』というカレンダー法語（二月）の通りだな、と思います。主人の患いと速すぎる往生がご縁で、いよいよ仏さまのご恩に気づかせてもらいました」と述懐されました。「罪障功徳の体となる　こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに徳おほし」という高僧和讃（曇鸞讃）のお導きですね。辛いこと、悲しいことが多いからこそ、仏様の功徳が深く味わえるのだ、と実感されているのです。

他方、近頃では「葬式も墓もいらん。遺骨は散骨でもしてくれ」という人が増えました。淋しい、流浪の人生ですね。

別れの寂しさを乗り越えて新たな生きがいが見出せるのは、再び遇える世界（お浄土）が戴けるからです。

「白道を歩いてゆく　お母さんや兄ちゃんたちのやるせなき愛情を総身に浴びて　それでも一人白道を歩いてゆく　いつかこの道が尽きたとき　そこにお浄土が開かれている　おおご苦労だった　と仏さまが抱きとって下さろう　もう　そのときは仏の一員　そこで本当に大切なことを思い切りさせていただけるのだ」。これは二十八歳で往生された竹下昭寿さん（元国鉄職員、広島）、辞世の詩です。「親鸞さま、ありがとう」の報恩講が今年も巡ってきました。

アルバム・アラカルト

（上）亮爾近影、（下）善正寺門徒展

☆行事ご案内☆

『報恩講』　講師・大畠信隆先生（岸和田）

11月2日（金）午後1時半

夜6時半親鸞様パワーポイント、音楽法要、琴演奏

3日（土）午前10時、　午後1時三全仏婦報恩講

☆お非時（食事接待）2日、午前11時より12時まで

手作り食事をお召し上がり下さい、ご参詣お持ちしています！

◇キッズサンガ

11月10日（土）午後4時より　お友達も誘ってきて下さい。
夕方５時の鐘撞きは誰でもＯＫ　当たりガム付。年中無休

☆秋勧進　11月23日（金、祝日）午前8時より

行事さんが巡回します。皆様のご協力よろしくお願いします

☆お内仏報恩講　12月1日（土）夜7時半より　庫裡で

音楽法要、ぜんざい、酒食を用意、お誘い合わせてお参り下さい。忘年会も兼ねています。

善正寺ホームページ「三重　善正寺」で検索.
「住職と坊守のつれづれ日記」が好評。開設4年2ヶ月で8万8千訪問突破、一日平均100ほど、悩み相談もOK。

［一縁会テレホン法話］　059・354・1454へお電話を！

坊守スケッチ

病床六尺と楽力

生後7ヶ月の初孫が、最近寝返りを打つようになった。左右に素早く回転し、日毎に新しいことができ、成長の早さに驚く。子育て中には気付かなかったが、寝返りを打つことは赤ん坊にとってはスゴイことなのだと、孫守で初めて知った。今まで仰向けに寝てばかりで、泣くだけしか訴えることが出来なかった赤ん坊が、我が力でうつ伏せになり、今までとは全く違った光景を見た。新しい世界が広がったのだ！

これに対して、今まで自由に動き回れた大人が、急に病気になるか、年老いて動けなくなる場合がある。健康な時には想像出来なかった苦痛。この苦しみは誰にも代わってもらえない。俳人・歌人の正岡子規もその一人である。今年は没後１１０年。明治３５年結核性カリエスのために僅か３７歳の若さで亡くなった。６年間に渡る闘病生活。子規ほど病床という小さな空間を、広く生きた人はいない。死の半年前から始まり二日前まで書いた新聞連載『病床六尺』には心を打たれる。息が途切れる最後の瞬間まで、いのちを燃焼しつくした強い心意気が伺える。

「病床六尺、これが我世界である。しかも六尺の病床が、余には広過ぎるのである。僅かに手を延ばして畳に触れることはあるが、布団の外へ足を延ばして体をくつろぐことも出来ない。甚だしい時は五分も一寸も動けない苦痛、煩悶、号泣。麻痺・・年が年中しかも六年間世間も知らずに寝ておれば、病人の感じるのはこんなこと」連載が始って二日目、子規は体調が急変し連載が一時中断。これを知った子規は「今日の命があるのは、病床六尺のおかげ。これを書くとき僅かに命が蘇るのです」と中断を頑なに拒否。新聞社側もその気迫に打たれて応援。

俳人の坪内捻典氏は「子規は『楽力』の人だった」と評する。病床にいながらも３度の食事、庭の草花、見舞い客との会話、新聞で読む世間の出来事に腹を立て、言いたいことを言う。日常の全ての出来事を丁寧に観察して、楽しむことで、子規独自の世界を広げた。子規自身も「病気を楽しむということにならなければ、生きていても何の面白味もない」と言い放った。

普通寝たきりになると、世間は「可哀想に」とか「気の毒に」と評する。しかし子規は同情や批判は真っ平ごめん。その病気さえも自分の味方につける『楽力』の持ち主だった。

亡き姑も晩年、毎朝枕元の平沢興先生の歌を口ずさむのが日課だった。「今朝もまた　覚めて眼も見え　手も動く　あああありがたや　この身このままま」。子規や姑のような楽力を持つにはどうしたらよいのか？やはり元気なうちから鋭い観察眼を持ち、他人は他人、自分は自分という確固とした価値観で生き抜く力を鍛えることだ。それは仏様の教えに出遇うことで磨かれる。まさかの時に備えて、早くからその準備を心掛けたいものだ。

☆寄　稿

四日市市　川　崎　孝　一

☆這えば立て　立てば歩めを　背に受けて　写る亮ちゃん　生後二百日

☆盆踊り　民謡風の　リズム乗せ　穂孕みの田を　渡る風あり

☆この所為は　姫だ彦だと　土砂降りを　茶化す者いて　車内が和む

四日市　釈　妙　水

☆裏通り　亡母（はは）重なりて　秋刀魚（さんま）香う

キッズサンガ・杉の子合唱団

☆１１月１０日（土）午後４時より、

♪三重組コーラス♪

☆練習・智積西勝寺様　午後１時半　１１月５日（月）・

※１１月１５日夜、西勝寺報恩講出演、

※１月２２日京都御堂演奏会１０回目

平成２４年度今後の主な行事予定

◇「報恩講」１１月２日午後１時半と夜６時半・３日午前１０時・午後１時三全

仏婦報恩講　講師大畠信隆師（岸和田）

今年から報恩講が１１月に変わります。

◇「秋勧進」１１月２３日午前８時より

◇「お内仏報恩講」１２月１日（土）夜７時半より

☆ホットニュース☆

☆十月の一ヶ月間、百五銀行阿倉川支店ロビーにて『第２回善正寺門信徒展』開催。今回は新たに伊勢型紙、布貼り絵、刺繍を加え、絵画、写真、書道など力作を展示。お友達と是非一度ご覧になって下さい。

☆今年から『報恩講』が１１月２日、３日になりました。３日午後１時より三全仏教婦人会主催の報恩講を勤めます。お非時は２日午前１１時より１２時まで。初日夜には親鸞様ご生涯のパワーポイントと音楽法要、また琴の生演奏に合わせて『親鸞様』の歌や童謡を歌います。ご法話は大阪岸和田市の大畠信隆先生をお迎えします。皆様お誘いあわせてお参り下さい。t

☆善正寺のホームページ。「三重　善正寺」で検索可．毎日更新の**「住職と坊守のつれづれ日記」**が好評。開設４年２ヶ月）８万８千アクセス突破１日平均１００訪問。悩み相談メールでも歓迎

☆長男潤爾の初著書『読んで旅するヨーロッパ』（三学出版）発売中

☆新刊本一縁会テレホン法話１４冊目の本**『心おきなく迷っていける』発売中！**

☆　編集子より　☆

「善正寺だより」二二七号をお届けします。◇山中教授のノーベル賞受賞で再生医療が進む。難病の患者さんには希望の灯となる。◇だが、長寿を喜べるか否かは一人一人の課題。◇今年から秋の報恩講になる。皆様お参り下さい。

今年から報恩講が十一月二日、三日に変わりました。今まで正月過ぎだったので二ケ月前倒しとなり秋本番から気が急きます。お非時の料理をどうしようとあれこれ悩みました。食材探しから保存が利くメニューまで考えるのも大変ですが、その他にも問題点があります。作り手が私も含めて年々老いていきます。新しい世代にバトンタッチしなければなりませんが、現実は前途多難。知り合いの坊守さんに尋ねるとどこもかしこも同じ状況。果たして今のままの行事を受け継ぐことができるか不安だと打ち明けてくれました。かと言って自分達の時代で報恩講の伝統を絶やしたくないという思いは同じです。私が嫁いだ四十年前は小雪が舞う屋外で餅つき、お供物盛り、花立て、お非時作り等、行事さんや世話方さんが手間隙惜しまず連日ご奉仕下さいました。老若男女入り混じって仕事を覚え、地域の人々との付き合い方を学び、生きた人間教育の場でした。自然と協力体制ができ上がり、いざという時に大きな力を発揮しました。近年その絆が崩れつつあります。時代がどう変わろうとも、親鸞様ありがとうの心は永遠に伝えなくてはなりません。新しい時代に沿った新しいやり方の報恩講、みんなの心が結集できるような新報恩講を共に考え、お迎えできるようにしましょう。皆様のご協力よろしくお願いします。どうかお誘い合わせてお参り下さいませ

平成二十四年十一月　合掌　善正寺坊守拝